

# TSUBOHORI

平成6年度（1994）

姫路市埋蔵文化財調査略報



1999

姫路市教育委員会

## はじめに

姫路市では埋蔵文化財発掘調査の成果を市民の皆さんにより早くお伝えするため、平成8年度から文化財調査略報を刊行してまいりました。さらに今年度は、改めて平成6年度の成果について報告いたします。平成6年度は、年度の終わりに未曾有の被害を出した阪神・淡路大震災がありました。その復興も進展してきた今日、この報告を出すことができました。

近年、都市再開発事業や土地区画整理事業の進展に伴い、埋蔵文化財の発掘調査件数は急増しています。姫路市では貴重な文化財を共有の財産として保存・継承していくよう努めてまいりましたが、発掘調査で得られたすべての情報を報告できますまでは、整理や研究に多くの時間が費やされてしまいます。

本書では、調査の概要を速やかにお伝えすることを目的としております。そのため、内容は必ずしも十分とはいえない点が多々あるかもしれません。しかし、調査成果の一端を速やかに公開することにより、本市が行っております埋蔵文化財発掘調査事業について、さらに理解を深めていただければ幸いに存じます。また、本書が地域の歴史をひもとかれる機会の一助となることを願ってやみません。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

姫路市教育長

高岡保宏

## 例言

1. 本書は、姫路市教育委員会が平成6年度(1994)に実施した埋蔵文化財発掘調査の略報である。なお、姫路城跡に関する発掘調査については、『城郭研究室年報』Vol. 5においてすでに報告している。
2. 発掘調査に伴う遺物・図面類は、姫路市教育委員会が保管している。
3. 本書の執筆は各調査担当者が行い、多田が編集した。御旅山13号墳についてのみ、発掘調査報告書をもとに要旨をまとめている。なお、「こんなものでました」は中川 猛が執筆した。
4. 各調査地の位置図は国土地理院2万5千分の1図を使用し、方位は上が北である。
5. 本書の図面は国土座標(第V系)を基準とし、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を使用した。
6. 土器の実測図は、弥生土器・陶磁器の断面は白抜きとし、瓦器のみスクリーントーンとしている。
7. 調査にあたっては、下記の方々・機関の指導・協力を得た。(五十音順、敬称略)  
今里幾次、宇垣匡雅、加古千恵子、片山一道、加藤史郎、亀山行雄、葛原克人、近藤義郎、高橋 護、田村善太、中田宗伯、中浜久喜、中村信義、土生田純生、平井悌二、藤原 学、間壁霞子、松本正信、三木保雄、光永真一、安川 満、姫路市四郷土地改良組合。
8. 遺物の整理および図版の作成には、岡本美香、小田 賢、佐藤朋子、田口啓美、田中章子、中山美歩、萩原寛子、藤戸 翼、圓尾かさね、山田郁子の補助を得た。
9. 表紙の写真は、見野長塚古墳の発掘状況を北側から写したものである。

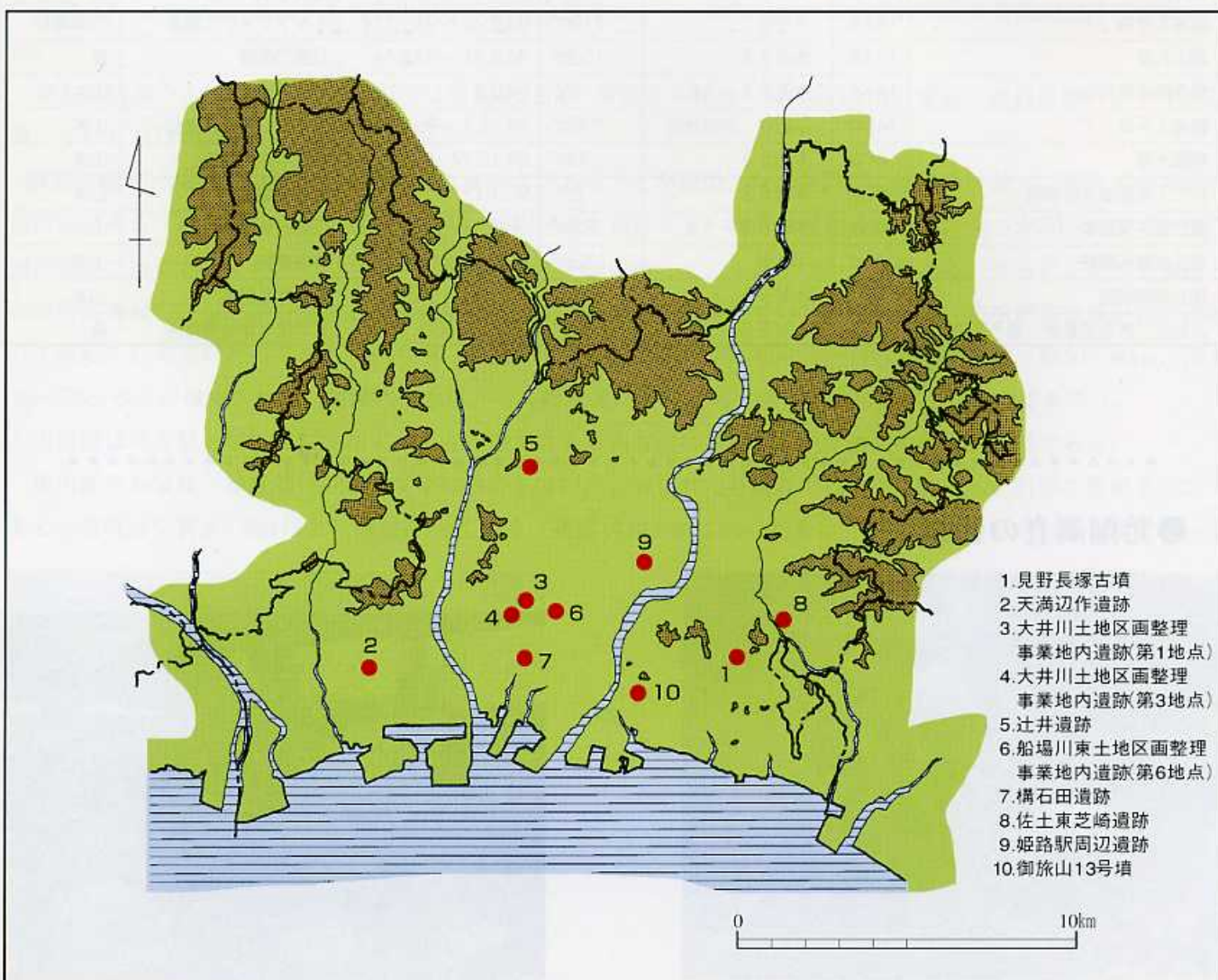


## 発掘調査の動向

平成6年度は、2ヶ所で古墳の調査を行った。見野長塚古墳では、前方部と後円部それぞれに1基ずつの横穴式石室が確認された。後円部の石室では金環や銅鏡片、管玉、ガラス玉、装飾付須恵器などが出土している。周溝の検出により、正確な墳形や規模も明らかになった。周溝内からは楕形などの形象埴輪と円筒埴輪が見つかった。御旅山13号墳は、平成5年度に台風による表土流失で銅鏡2面が発見された。今回の調査は、遺構の現状を確認するためのもので、遺構はすでに流失したものか確認できなかったが、ガラス玉数点を採集している。

天満辺作遺跡と佐土東芝崎遺跡では縄文土器が出土している。天満辺作遺跡では、弥生時代前期～中期の土器と弥生時代末の特殊な壺形土器も見つかった。弥生時代は、船場川東土地区画整理事業地内遺跡で後期～古墳時代にかけての竪穴住居跡が検出されたほか、大井川土地区画整理事業地内遺跡でも溝の埋土に弥生時代中期の土器を包含していた。見野長塚古墳下層の土坑からも中期の雲母土器などが見つかった。古墳時代では、姫路駅周辺遺跡で韓式土器が出土している。奈良時代については、やはり姫路駅周辺第3地点遺跡で市之郷廃寺との関連が推定される軒瓦や鵲尾などが見つかった。中世については、ほとんどの調査で遺構か遺物が確認されている。

見野長塚古墳では、平成7年3月18日に発掘調査成果の現地説明会を行った。その後、平成7年3月28日に県の史跡に指定されている。



平成6年度 発掘調査地点の位置図



| 遺 跡 名                         | 調査回数 | 所 在 地     | 調査面積   | 調 査 期 間          | 調 査 原 因 | 調査担当者  |
|-------------------------------|------|-----------|--------|------------------|---------|--------|
| 天満辺作遺跡                        | 2次   | 大津区天満字辺作  | 286㎡   | 95.1.19～95.3.17  | 土地区画整理  | 多田暢久   |
| 辻井遺跡                          | 22次  | 辻井1丁目     | 97㎡    | 94.12.1～94.12.10 | 個人住宅建設  | 秋枝 芳   |
| 大井川土地区画整理事業地内遺跡<br>(第1地点8区9区) | 9次   | 町ノ坪字中ノ町   | 800㎡   | 94.9.29～95.1.13  | 土地区画整理  | 大谷輝彦   |
| 大井川土地区画整理事業地内遺跡<br>(第3地点)     | 10次  | 玉手字鹿谷道    | 546㎡   | 95.2.1～95.2.25   | マンション建設 | 秋枝     |
| 船場川東土地区画整理事業地内遺跡<br>(第6地点8区)  | 10次  | 飯田字大屋敷    | 516㎡   | 94.9.29～95.3.17  | 土地区画整理  | 大谷     |
| 構石田遺跡                         | 2次   | 飾磨区構石田    | 360㎡   | 94.5.31～94.7.9   | 土地区画整理  | 多田     |
| 姫路駅周辺遺跡                       | 2次   | 市之郷町      | 1,360㎡ | 94.10.1～95.3.27  | 土地区画整理  | 秋枝     |
| 御旅山13号墳                       | 1次   | 飾磨区妻鹿     | 800㎡   | 94.8.1～95.8.9    | 自然崩壊    | 松本正信 他 |
| 見野長塚古墳                        | 2次   | 四郷町見野字長塚  | 2,051㎡ | 94.10.1～95.3.27  | 圃場整備    | 秋枝     |
| 佐土東芝崎遺跡                       | 11次  | 別所町佐土字東芝崎 | 501㎡   | 94.11.15～95.3.1  | 土地区画整理  | 多田     |

| 姫 路 城 跡         |      |           |      |                   |           |      |
|-----------------|------|-----------|------|-------------------|-----------|------|
| 商工会議所前          | 139次 | 総社本町・坂田町  | 63㎡  | 94.5.7～94.6.6     | 管路新設      | 森 恒裕 |
| 北勢隠門            | 140次 | 本町6 8     | 32㎡  | 94.8.11～94.12.9   | 石垣修理      | 森    |
| 喜斎門             | 141次 | 本町6 8     | 169㎡ | 94.8.11～94.12.9   | 石垣修理      | 森    |
| 国道2号線(1)        | 142次 | 下寺町       | 119㎡ | 94.8.26～94.10.14  | キャブシステム建設 | 山本博利 |
| 姫山公園            | 143次 | 本町6 8     | 103㎡ | 94.8.31～94.9.14   | 公園灯改修     | 森    |
| 県立姫路東高校         | 144次 | 本町6 8-7 0 | 3㎡   | 94.9.9            | 衛生施設改修    | 山本   |
| 国道2号線(2)        | 145次 | 平野町・元塩町他  | 176㎡ | 94.12.1～95.2.15   | キャブシステム建設 | 山本   |
| 南部土塁            | 146次 | 本町6 8     | 20㎡  | 94.12.12～94.12.13 | 仮設事務所建設   | 山本   |
| N T T 姫路支店駐車場   | 147次 | 本町6 8     | 6㎡   | 95.1.12           | 駐車場整備     | 山本   |
| 県立姫路東高校         | 148次 | 本町6 8-7 0 | 88㎡  | 95.1.23～95.1.31   | 空調設備設置    | 山本   |
| 商工会議所東側         | 149次 | 下寺町       | 55㎡  | 95.1.26～95.2.24   | 管路新設      | 山本   |
| 国立姫路病院          | 150次 | 本町6 8     | 521㎡ | 95.1.31～95.3.16   | 施設更新整備    | 山本   |
| A地区(家老屋敷跡公園予定地) | 151次 | 本町6 8     | 80㎡  | 95.2.7～95.3.17    | 家老屋敷跡公園整備 | 森    |

## ●発掘調査の体制

### 教育委員会事務局

教育長 前 田 一 忠  
 教育次長 本 城 章 宏  
 文 化 部 長 三 木 庸 義  
 文 化 課 長 山 下 紀 年  
 課 長 中 山 智 雄  
 係 長 森 秋 枝 子  
 主 事 秋 枝 子  
 技 師 秋 枝 子  
 技 師 秋 枝 子

### 城 郭 研 究 室

係 長 山 本 博 利  
 技 師 森 恒 裕



見野長塚古墳発掘調査の現地説明会の様子



## 1. 見野長塚古墳

(第2次調査)

1. 所在地 姫路市四郷町見野字長塚281 他
2. 調査面積 2,051㎡
3. 調査期間 平成6年10月1日～平成7年3月27日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置図（「姫路南部」）

市川東岸には、弥生時代から室町時代にかけての遺跡が数多くあることで知られている。なかでも、壇場山古墳・山之越古墳・播磨国分寺跡は国指定史跡に、宮山古墳は県指定史跡に指定されている。

このたび、四郷町明田・見野・本郷地区で、土地改良事業が計画された。事業予定地内には東土居遺跡や見野長塚古墳などの周知の遺跡がある。平成5年度に遺跡確認調査を実施した。調査の結果、見野長塚古墳で周溝の一部を確認した。当該地は事業予定地の最高所に位置することから削平地として事業が計画され、古墳の保存状況を確認するために平成6年度に発掘調査を実施した。

見野長塚古墳は墳丘が後世の耕作などで大幅に改変され、古墳の規模・主体部などは不明である。しかし、地元で保管されている出土品などから市川東岸の重要な遺跡として、昭和48年4月6日付で姫路市指定史跡に指定された。

調査開始前の古墳の現況は、水田中に南北約22m、東西5～8m、高さ約1.2mの墳丘（地目原野）がわずかに残っているだけであった。

調査の結果、墳形は全長が約34mの前方後円墳であることが判明した。後円部の直径は約22m、前方部の全長は約12mである。ほぼ南北方向に主軸をもち、後円部は北側にある。周溝は幅が5～7m、深さが50～80cmで、後円部の東側で途切れ、この部分に土橋が想定される。土橋の南と北に1基ずつ小土坑がある。さらに、土橋北西約5mの周溝西端で、須恵器の器台と装飾付須恵器壺が1個ずつ立てられていた。おそらく、古墳構築後須恵器を使用して祭祀を行っていたのであろう。一方、西側の周溝内では、くびれ部中央から前方部にかけて幅50～90cm、深さ20～30cmの溝が確認された。周溝内の水は、この排水溝から微高地南端の低地に排水されたのであろう。

主体部は前方部と後円部に1基ずつあり、いずれも東西方向に主軸をもつ片袖式の横穴式石室である。

後円部の石室は、基底部付近がわずかに遺存していた。残された石組みや石の抜き跡から、石室の規模を想定すると、玄室は全長が4.9m以上、幅が2.5mである。羨道は幅が約1m、全長は不明である。石室内から須恵器・土

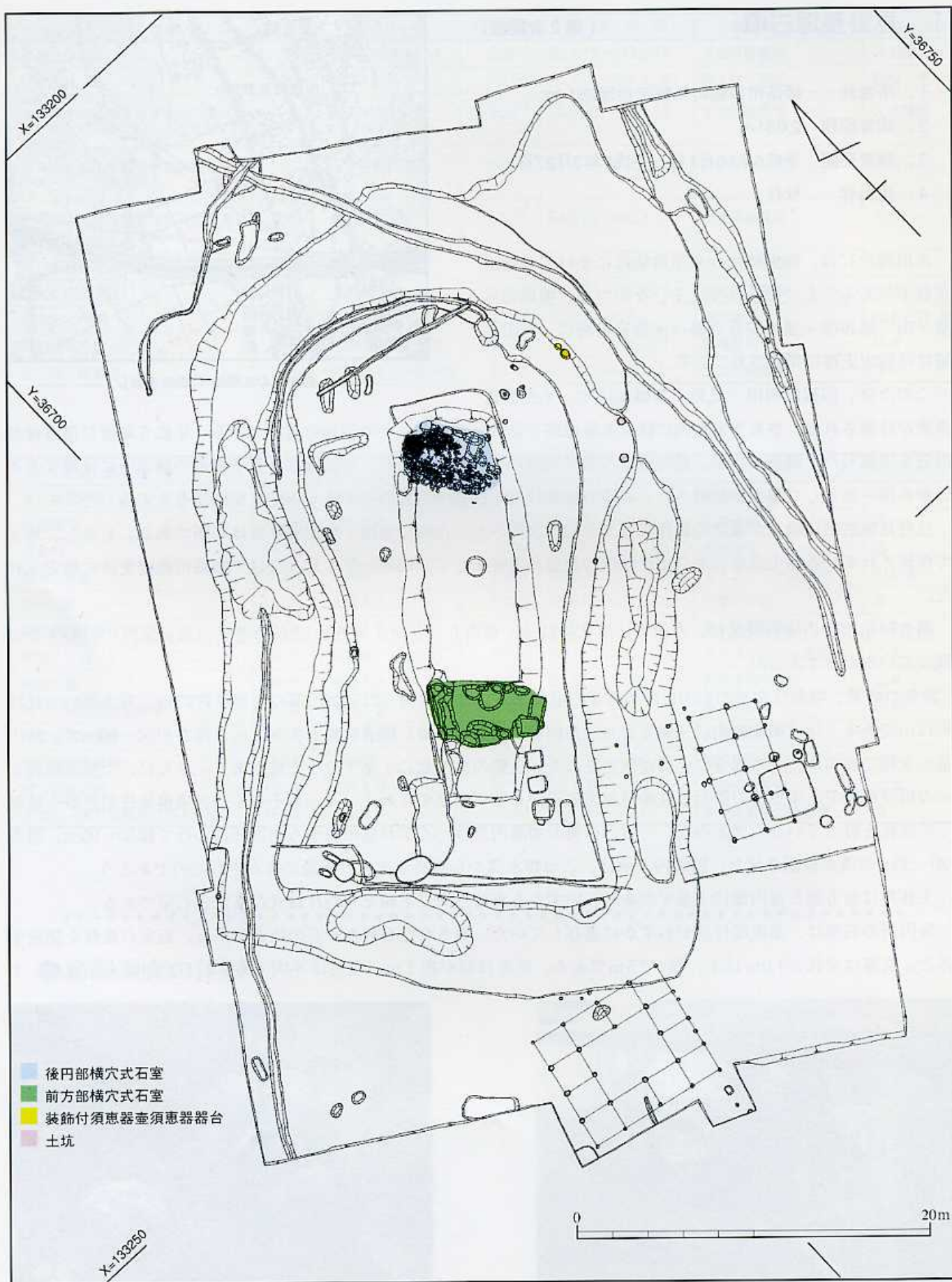


後円部横穴式石室検出状況（東から）



後円部横穴式石室内遺物出土状況（北から）





見野長塚古墳平面図



師器・石製品・鉄製品・装身具・銅鏡などが多数出土した。須恵器は奥壁部と袖部から一括出土した。器種には、壺・杯・高杯・器台・台付碗・装飾付須恵器・甕・甌などがある。これらの資料はいずれも6世紀第1四半期に比定される。特に、装飾付須恵器は首長が所有する重要な器物で、まとまって6個体分以上出土したことは注目されよう。土師器は奥壁部から須恵器とともに高杯が出土し、須恵器と同時期である。

玄室内の中央部西端で金環2個、北端で金環2個と管玉やガラス玉などの装身具が一括して出土した。特に、後者では装身具周辺の礫床に薄く朱が遺存し、この部分に頭部が想定されることから、被葬者は頭部を西にして埋葬されたことが伺える。また、玄室中央部の南と北で鏝が1本ずつ検出された。その距離は約80cmで、これは木棺の幅を示すものであろう。東端の状況が不明なために木棺の全長は不明である。

詳細な出土状況は不明であるが、玄室内より人間の歯が2点と頭蓋骨の細片が3片出土し、歯には目視で朱の付着が認められる（頭蓋骨にも朱が付着している可能性もある）。京都大学の片山一道助教授（当時）の鑑定によれば、歯と頭蓋骨片のみであり、資料が少なく保存状態も悪いために制約はあるが、被葬者は歯の磨滅状況から壮年で、強いて性別をいえば男性である。

前方部の石室は大正年間に調査され、6世紀前半の須恵器や金環・紡錘車・刀などが出土した。その後、石室は破壊されたが、出土品は地元で保管されていた。このたび、改めて発掘調査を実施した結果、攪乱土内から6世紀前半の須恵器とともに、6世紀中頃から7世紀初頭にかけての須恵器が多数出土した。さらに、鉄斧・鉄鎌・馬具・鏝などの鉄製品やガラス玉などの出土も確認した。前方部の主体部は徹底的に破壊されていたために、構築時期は不明である。しかし、多数出土した7世紀初頭の須恵器は、後円部の横穴式石室とは異なり、前方部の横穴式石室でこの時期まで追葬などが行われ、石室が再利用されていたことを示唆する。

周溝内から埴輪がコンテナに約280箱分出土した。須恵質埴輪は認められず、いずれも土師質の埴輪で磨滅が著しい。円筒埴輪がほとんどであるが、水鳥や楕円形や家形などの形象埴輪もある。墳丘が削平されているために、埴輪の配置を調査で把握することはできなかった。

今回の調査の結果、見野長塚古墳を研究するうえで貴重な資料が得られた。6世紀前半に造られ7世紀初頭に終わる見野長塚古墳は、市川東岸の最後の首長墓で今後の調査研究の進展が望まれる。

なお、見野長塚古墳は、関係者の努力により、平成7年3月28日付で兵庫県指定史跡に指定された。

以上が見野長塚古墳の調査概要で、今回の調査で新たに判明した調査成果について記す。

見野長塚古墳構築以前の遺構には、弥生時代中期後半～古墳時代後期にかけての土坑群がある。弥生時代中期後半の土坑から雲母土器（畿内からの搬入品）が、後期の土坑からミニチュア製の壺・板状鉄斧・管玉・鼓形器台などが出土した。古墳時代後期（宮山古墳と同時期）の土坑から鉄製品と須恵器杯が出土した。これらの遺構は、遺物の出土状況や埋土の状況から土坑墓の可能性が高い。

見野長塚古墳構築以降の遺構は、周辺部から奈良時代前期の溝・土坑を確認した。溝内から重弧文軒平瓦と複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土した。軒丸瓦は範キズから赤坂1号窯跡・辻井遺跡・姫路駅周辺第3地点遺跡（市之郷廃寺）の出土品と同範である。平安時代後半の遺構には掘立柱建物跡・溝・土坑があり、土坑内から土師器、瓦質土器、中世須恵器と中国製の青磁・白磁が一括出土した。

以上、今回の調査で見野長塚古墳のみならず、弥生時代中期から平安時代後半にかけての遺跡をあらたに発見することとなった。



平安時代後半の掘立柱建物跡検出状況（東から）



## 2. 天満辺作遺跡

(第2次調査)

東天満土地区画整理事業地内

1. 所在地 姫路市大津区天満字辺作
2. 調査面積 286㎡
3. 調査期間 平成7年1月19日～平成7年3月17日
4. 担当者 多田

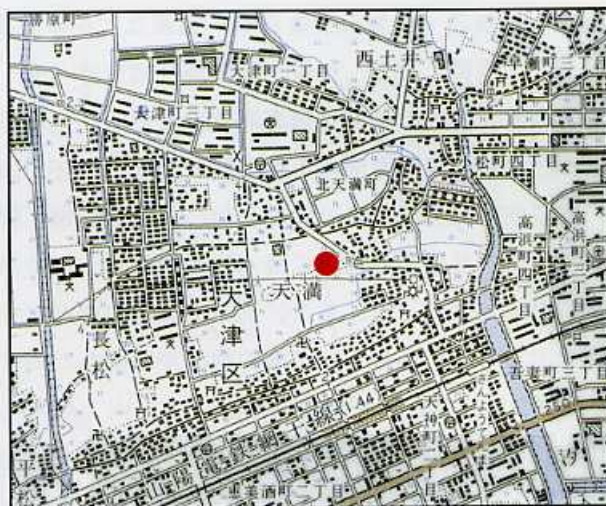
夢前川河口周辺の平野には、南から外列、中列、内列と3本の砂堆が存在する。古代には現在よりも北側に海岸線が位置していた。砂堆の存在は、それが徐々に南側へ移動したことを示す。天満周辺では、姫路南高等学校のすぐ南側が内列砂堆、聖安寺や天満集落一帯が外列砂堆となる。その中間に位置する中列砂堆の一部を含めて東天満土地区画整理事業は計画された。平成4年には遺跡の確認調査を行い、室町時代の集石遺構などが発見されている。

今回の調査は道路の予定地で、幅約9m×長さ約37mで北東方向の南側の隅が欠けた長方形をしている。畦畔により3区画に分かれ、北から1区、2区、3区とした。

1区は砂堆の中央部に位置する。耕土の下に厚さ約20cmの淡黄灰色をしたやや砂質の層がある。その下は褐色の砂層で、これが砂堆の本体と見られる。この層には、遺物などは一切含まれない。層の上面からは、土坑やピット、溝などの遺構が検出されている。遺構内から遺物は、ほとんど出土していない。そのため、遺構の時期や性格は不明である。しかし、土坑については中世頃の墓であった可能性がある。1区の南端には一段の落ち込みがあり、多量のハマグリを中心にアサリ・ハイガイ・カキなどの貝殻が集中して出土している。一緒に出た備前焼などから、室町時代頃に食用とした貝を捨てたものと推定される。その他にも、中国製の青磁や国産品としては、備前焼(第Ⅳ～Ⅴ期)の壺や甕に描鉢、土師器の土鍋、皿など室町時代頃の遺物が多く出土している。

2区・3区も1区と同じく、耕土下から室町時代頃の土坑やピットが見つかった。3区の土坑には、皮つきの松材を桶状に組んで埋めたものも確認された。さらに2区・3区では、約50cm下層に暗青灰色の砂層があり、縄文～弥生時代にかけての土器が見つかった。

縄文土器は、後期の磨消縄文を有する深鉢が出土した。弥生時代になると、前期～中期の壺や甕と後期末の壺形土



調査地の位置(「綱干」)



中列砂堆「島畠」の状況(東から)



1区の中世土坑の断面(西から)



3区の中世の土坑(南から)



器が出土している。このうち壺形土器は特殊壺と共通する特徴を有し、口縁部の外面には鋸歯文を施す。胎土も吉備（岡山県南部、足守川流域一帯）の土を使用している。ただ、出土したのは口縁部のみで胴部は見つかっていない。墓ないしは何らかの祭祀に使われたものと推定されよう。これら下層の遺物は、縄文～弥生時代末までの土器が混ざっており、しかも磨滅は少ない。北側、1区付近の砂堆の中央部から流れ込んだものとみられる。

天満辺作遺跡の時期は、縄文～弥生時代の下層と中世後期（室町時代）の上層に大きく分かれる。縄文時代の後期までには中列砂堆がすでに形成され、弥生時代の末頃まで砂堆上での人々の活動が見られたのであろう。その痕跡が砂堆下へと流れ込んだのが下層の遺物と考えられる。

弥生時代以降は一時砂堆上の利用は途絶える。室町時代には、この辺りは神護寺領福井庄の南東限であった。この頃、砂堆上は墓地などとして再び利用されたようである。

最終的に近世に入ると、遺物・遺構ともに急激に減少する。江戸時代には南側の外列砂堆上へ集落が移り、中列砂堆上は、現在のように「島畠」と呼ばれる砂地の畑地となったと推定される。

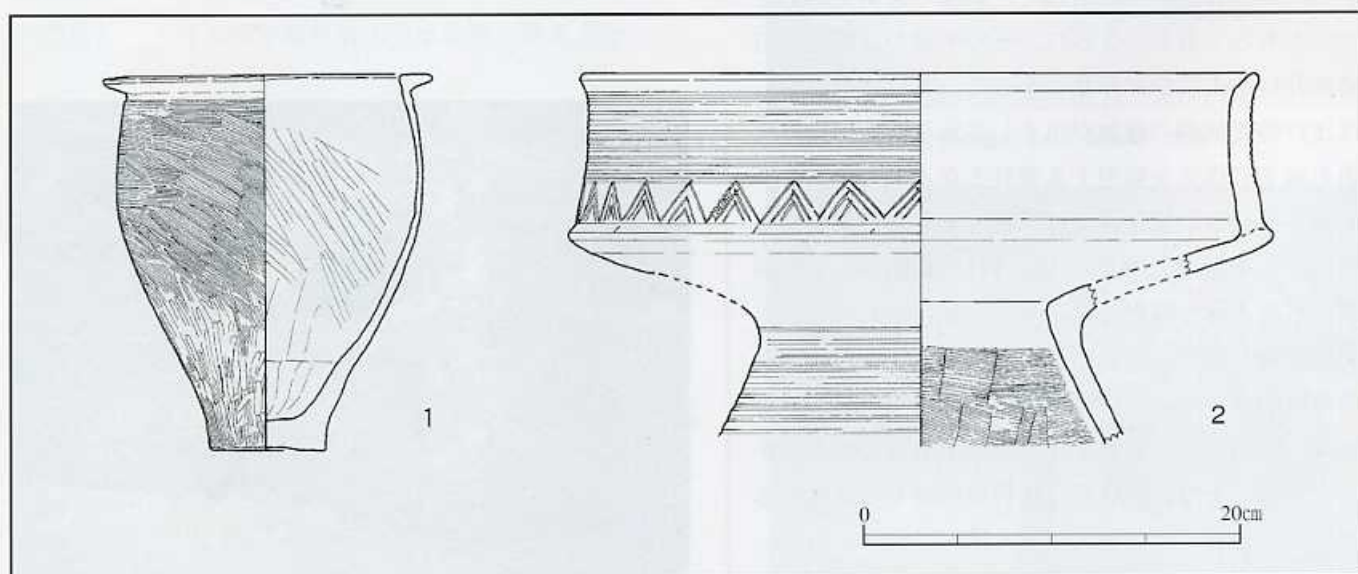
市内における縄文時代後期や弥生時代前期については、遺跡の確認そのものがまだ少ない。今回、遺構に伴うものではなかったが、海岸地域における資料を追加できた。また、特殊な壺形土器の出土は、弥生時代末の吉備と播磨の交流を示すものといえよう。



3区の縄文土器の出土状況（南から）



2区から出土した弥生時代末の特殊な壺形土器



出土遺物の実測図（S=1:4）（1. 3区出土の弥生土器甕、 2. 2区出土の特殊な壺形土器）



## 姫路城跡発掘調査の動向

平成6年度、姫路城跡では13ヶ所の発掘調査を行った。調査地点は、中堀の城門石垣や武家屋敷地の他、外曲輪の町家地区や寺町の一部である。調査の総面積は1,435㎡となった。

石垣修理に伴う城門の発掘調査は、北勢隠門東側および喜斎門西側の高石垣で実施した。江戸時代の絵図によると、北勢隠門の東側石垣上面には枡形虎口の櫓門の多門が建てられていた。しかし、調査で多門櫓の建物基礎は検出されていない。石垣の下からは、堀の掘削と石垣構築時の地山の掘り込み痕跡が見つかっている。

喜斎門西側石垣の上面では、土堀の基礎と門櫓の西端基礎と推定される石組みが発見された。土堀基礎は、西側で城内側へ斜めに下っており、そのまま城内区画の土堀へと連なっていたらしい。また、門跡からは礎石と推定される石と、石組み溝が検出されている。この溝は内曲輪から内堀への排水のためのものと考えられる。石垣内部の盛土は、他の発掘調査で確認された石垣内盛土に比べて締まりは良好であった。遺物は16世紀後半を下限とする軒瓦や土師器皿、備前焼播鉢などが出土している。喜斎門石垣は、築城期の様相を残している可能性が高い。

中曲輪の調査では、国立姫路病院内で江戸時代中期以降の絵図に描かれている馬場に関連する遺構が見つかっている。遺構は幅4m・深さ1m以下の護岸石組みを有する堀状遺構で、馬場の東側を区画していたものである。さらに、その下層から円形の石積み井戸や土坑などが見つかった。下層の遺構からは江戸時代初期の遺物が出土しており、池田氏時代頃の城下町構造を解明する資料となるものである。

大手門前面のA地区では、家老屋敷跡公園整備事業に伴う遺構確認調査で江戸時代の街路と、その両側の石組み溝を確認した。

外曲輪の調査は小規模なものが多く、まとまった遺構は出ていないが、江戸時代の街路や中堀への排水溝、鍛冶関係の遺物を包含した土坑などが見つかった。また、下層から播磨国府跡との関連が考えられる奈良～平安時代の溝も検出されている。



北勢隠門東側石垣の上面（西から）



喜斎門土堀斜面の土堀基礎（南西から）



国立姫路病院で見つかった馬場を区画する堀状遺構



遺跡を訪ねて

## 播磨国分寺跡

姫路市御国野町国分寺

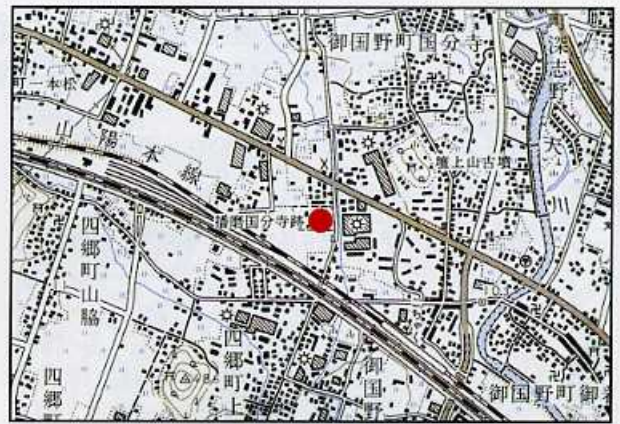
姫路平野の中央を南北に流れる市川。その東岸、古代山陽道沿いに位置するのが播磨国分寺跡です。北方約500mには播磨国分尼寺跡もありました。さらに、周辺には弥生時代の国分寺台地遺跡や播磨最大規模の前方後円墳である壇場山古墳など古代の遺跡が数多く分布しています。

播磨国分寺は、奈良時代に聖武天皇の詔により建立されましたが平安～鎌倉時代頃に廃絶しています。その後、江戸時代に牛堂山国分寺として再建されました。寺域の多くは水田化し、塔跡に礎石が残るだけでした。大正10年には国の史跡に指定され、昭和43年から平成3年まで13次にわたる発掘調査が行われています。

調査では南大門・中門・金堂の基壇の一部が確認されています。回廊は瓦積基壇で、中門から金堂に取りついていました。金堂前には、灯籠の抜き取り跡があり、その基礎は亀甲状の盛土表面に布目瓦片を貼り付けたものでした。塔跡は心礎を中心に16個の礎石が残っていました。そのうち南東の2石は、大正時代の史跡指定時にコンクリートで据え直されていたことが分かっています。塔の基壇化粧については水田化後の掘削がはげしく、確認できていません。

平成2～4年に「ふるさと歴史の広場」として整備が行われ、平成5年度からは一般に公開されています。整備では、塔や中門の基壇や築地塀などを復元しました。特に、築地塀は版築という当時の工法で復元しています。

◇あし JR山陽本線御着駅下車北西へ徒歩5分



播磨国分寺跡の位置（「姫路南部」）



整備された中門・金堂の基壇（南から）



寺域西側の復元された築地塀（北東から）



整備状況の平面図



塔跡発掘の様子（南から）



### 3. (仮称)大井川土地区画整理事業地内遺跡

#### 第1地点8区9区

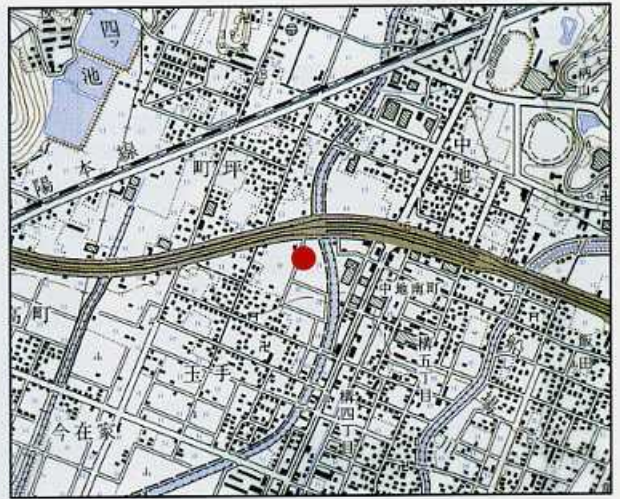
(第9次調査)

1. 所在地 姫路市町ノ坪字中ノ町257-1 他
2. 調査面積 800㎡
3. 調査期間 平成6年9月29日～平成7年1月13日
4. 担当者 大谷

姫路平野の西部、大井川、水尾川と名付けられた2本の河川に挟まれた区域で土地区画整理事業が計画された。これに伴って、昭和61年から遺跡の確認調査を行い、新たに6ヶ所の遺跡を発見した。第1地点は事業地の北東に位置する遺跡で、今回の調査区はこの北東端にある。

8区は、北から延びる微高地の東の縁辺部に位置する。見つかった遺構は、掘立柱柱穴約120基、竪穴状遺構4基、溝1条などである。柱穴は、掘方の径が20～30cmで、およそ7棟程度の建物に復元できる。調査区西端に位置する最大のもは東西3間×南北3間以上、北面庇付、南側はさらに調査区外に延びる。方位はすべてN-19°-E前後となる。出土遺物には、東播系須恵器碗・捏鉢、土師器皿などがあり、12世紀中頃～13世紀前半頃と思われる。竪穴状遺構は方形あるいは長方形のプランで、一辺2～3m、検出面からの深さ20～30cmを測る。内部には、被熱により赤化した礫が置かれ、埋土中には多量の焼土粒が含まれていた。これらの中には、鉄滓が出土した遺構もあること、また、包含層中からではあるが櫛の羽口が出土していることなどから、この竪穴状遺構は鍛冶に関係するものと考えられる。出土遺物は、東播系須恵器碗・捏鉢、土師器皿、青磁、白磁などがあり、掘立柱建物跡と同時期と思われる。これらの竪穴状遺構は、掘立柱建物跡の内部に位置するか隣接しており、また時期も同じであることから、一連となって機能していた可能性が高いと思われる。溝は、幅約2m、深さ約15cmで北西から南東方向約25m分が見つかった。出土遺物には、弥生時代中期中葉を中心とした壺、甕、高杯などがあり、わずかながら前期後葉の壺、後期の甕なども出土している。

9区は調査区の西半分が微高地となるが、総じて遺構は希薄で、数基の土坑が見つかっただけである。土坑は、径約1.5m、深さ約70cm、内部を漆喰で塗り固めたいわゆる野井戸である。江戸時代末と思われる。



調査地の位置 (「姫路南部」)



第1地点8区全景 (東から)



第1地点8区西部 掘立柱建物跡 (東から)



## 4. (仮称)大井川土地区画整理事業地内遺跡

第3地点

(第10次調査)

1. 所在地 姫路市玉手字鹿谷道258-2・1
2. 調査面積 546㎡
3. 調査期間 平成7年2月1日～平成7年2月25日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置 (「姫路南部」)

平成5年度に第3地点遺跡6・7・8・9区の調査を実施した(第8次調査)。調査の結果、基本的な土層は耕作

土(約20cm)・黄褐色土(5～10cm)をへて、礫まじりの黒褐色である。遺構は黒褐色土を掘り込んでいる。溝・河道・ピット・土坑などの遺構を確認し、備前焼・中世須恵器・土師器・瓦質土器・中国製磁器・滑石製石碁・銅銭・漆器・貝殻などの遺物が出土した。

このたび、第8次調査区に近接する水田2筆でマンション建設が計画され、建設業者から調査依頼があり、事前に発掘調査を実施した。調査の結果、溝・土坑・掘立柱柱穴などの遺構を確認した。掘立柱柱穴は約30基確認したが建物や柵としてはまとまらない。また、出土遺物も備前焼や中世須恵器・土師器・中国製の白磁などの細片がコンテナに1箱分出土したにとどまる。

## 5. 辻井遺跡

(第22次調査)

1. 所在地 姫路市辻井1丁目767
2. 調査面積 97㎡
3. 調査期間 平成6年12月1日～平成6年12月10日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置 (「姫路北部」)

昭和62年度に国庫補助を得て、辻井廃寺の南限の確認調査を実施した(第13次調査)。南門と思われる新旧2時期の掘立柱建物跡を確認するとともに、弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。

このたび、当該地で木造2階建ての住宅建設が計画された。辻井廃寺の南限を画する門跡が確認されていることから、調査方法について建設業者と協議することとなった。現状地盤に約1m盛土を行い、盛土内に基礎を埋設し遺構を保存することとなったために、工事の及ぶ周囲の擁壁部分についてのみ調査を実施した。幅1mで調査を実施し、一部については調査範囲を拡大した。

北部で第13次調査で検出した弥生時代後期の竪穴住居跡の一部と土坑や溝を確認した。竪穴住居跡内から器台・壺・甕・高杯・石鏃・砥石などの遺物が出土し、これらの資料のなかには第13次調査で出土したものと同一個体のものもある。さらに、平安時代後半の柱穴と土坑を確認した。東部では平安時代後半の柱穴と幅1.2mの東西方向に走る溝を確認し、溝内から中世の魚住窯の鉢の細片が出土した。

今回の調査では、寺院に関する遺構を確認することはできなかった。第13次調査で確認した竪穴住居跡の一部を調査し、溝の東への伸びを確認するにとどまる。



## 6.(仮称)船場川東土地区画整理事業地内遺跡

### 第6地点8区

(第10次調査)

1. 所在地 姫路市飯田字大屋敷120-1 他
2. 調査面積 516㎡
3. 調査期間 平成6年9月29日～平成7年3月17日
4. 担当者 大谷

姫路平野の中程を南流する船場川流域には、縄文時代晩期～古墳時代にかけての遺跡が数多く分布している。この中流域に位置する船場川東地区において、土地区画整理事業に伴って昭和61年から6ヶ所（第1～6地点）の遺跡を調査してきた。今回の調査地は事業地内の最も北に位置する第6地点の中程にある。

調査区の大半は、北西から南東方向に流れる弥生～古墳時代の河道—旧船場川によって占められており、その堆積は最も深いところで約3mにも達している。旧船場川の流れは、すぐ北側の6区（第9次・平成5年度調査）では、北東から南西方向であったことから、かなり蛇行しながら南流していたと思われる。この旧河道の北側は3・4区（平成2年度調査）のある微高地を形成し、今回の8区南端で見つかった微高地（おそらく7区・平成5年度調査と一連のもの）はこれとは別のものであることが判明した。この微高地上では、竪穴住居跡7棟、溝などが約120㎡ほどの狭い場所に密集して見つかった。住居跡の平面形は方形のもの6棟、円形のもの1棟である。それぞれの切り合い関係から、円形の住居跡が最も古いと思われる。規模は1辺ないし径4～5m、検出面からの深さ10～20cmである。柱は4本で中央に炉を持つものもある。出土遺物は総じて少なく、中にはまったく出土しなかったものもあるため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期～古墳時代初頭を中心とする時期であると考えられる。溝は、住居跡の一部を切って南西から北東方向に流れる。幅約1.5m、深さ約50cmで、北東端は旧河道にまで達している。出土遺物からみて住居跡群とはほぼ同じ時期と思われる。

調査区北端では、平安時代後半の溝が見つかった。幅約2m、検出面からの深さ約40cm、東西方向に流れる。この溝は、旧河道の埋没後の面で見つかったことから、この頃までには、河道の流れが変わり、付近が水田として利用されるようになっていたと思われる。



調査地の位置（「姫路南部」）



第6地点8区全景（北から）



第6地点8区南端 竪穴住居跡（北東から）



## 7. 構石田遺跡

(第2次調査)

加茂南土地区画整理事業地内

1. 所在地 姫路市飾磨区構石田
2. 調査面積 360㎡
3. 調査期間 平成6年5月31日～平成6年7月9日
4. 担当者 多田

姫路平野の南部では、古い海岸線の名残である海岸砂堆が微高地として確認できる。加茂の集落や飾磨区須加から今在家へ続く微高地などである。砂堆上には浜の宮や津田の天満宮があり、古くから土地利用が進んでいたらしい。

一方、砂堆間の堤間低地（ラグーン）の開発は、砂堆上よりやや遅れて開始されたと推定される。

構石田遺跡は加茂集落南側の堤間低地にあたる。調査は土地区画整理事業に伴って行われた。条里型の地割りが存在することから、地割りの施行を含めた堤間低地の開発時期が問題となる。遺跡の確認調査は平成3年に実施し、事業地の南部でピットなどを検出している。今回は、その成果に基づき南部の道路予定地に幅2mのトレンチを東西方向に3本設定し、西側から1～3区とした。

調査では、全域にわたり縄文海進後の新期扇状地とみられる灰色砂礫層が出ている。「石田（せきだい）」という小字名のとおり、曾根地であったことがわかる。

遺構は、1区でピット2基と南北方向の自然流路2条を確認した。2区では耕土直下で暗灰色砂礫層となり、遺構は見つかっていない。3区は南北方向の小規模な溝が1条検出されている。このように遺構は少なく、開発以来ほとんど水田であったと考えられる。

遺物の出土量は比較的少ない。中国の龍泉窯系の青磁碗や、国産品としては、第Ⅴ期の備前焼（壺・甕・播鉢）、瀬戸灰釉合子、中世須恵器の捏鉢、土師器の土鍋、皿など、そのほとんどは中世のものであった。条里型地割りと関連については、1区で検出された自然流路の方向が、周辺の条里型地割りの方向と一致しない。流路が完全に埋まった最終層には、多くの土器が含まれていた。それらも12世紀前半の瓦器碗など平安時代末～中世にかけてのものが多く。船場川下流域の条里型地割りは、中世以降に形成された可能性が高いであろう。構石田遺跡は、中世になって水田として開発されたと推定される。



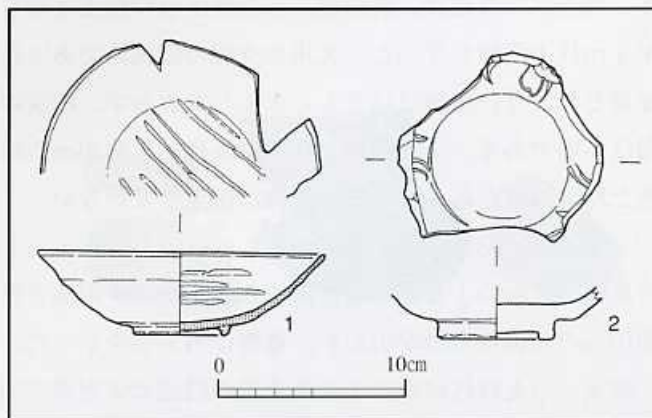
調査地の位置（「姫路南部」）



1区西部の自然流路の断面（南東から）



3区の調査の様子（南西から）



出土遺物実測図（S=1;4）（1. 1区瓦器碗、2. 3区青磁碗）



## 8. 佐土東芝崎遺跡

別所土地区画整理事業地内（第11次調査）

1. 所在地 姫路市別所町佐土字東芝崎
2. 調査面積 501㎡
3. 調査期間 平成6年11月15日～平成7年3月1日
4. 担当者 多田

飾東町の山間部を抜け出た天川は、御着の近くで東側へと大きく迂回しながら播磨灘へとそそぐ。別所付近では、集落のある更新世段丘との間に氾濫原が広がる。ここには条里型の地割りが確認できるが、一部には天川支流の痕跡とみられる蛇行した地割りも見られる。

平成2～3年にかけて天川氾濫原と一部段丘上で土地区画整理事業に先立ち、遺跡の確認調査を実施した。調査では国道2号線とJRとの間の2ヶ所で、縄文土器を包含する暗褐色の土層を確認している。今回、事業の進行に伴い道路予定地分を発掘調査した。

1区は東西65m・南北6mで、土地区画整理事業地の西端に位置する。西側には播但自動車道路が走る。1区周辺は佐土東芝崎遺跡とする。

1区の中央部では、耕土下約20cmから埋没した微高地が検出された。微高地上には、自然の流水によるものとみられる南北方向の溝が4条検出されている。溝01からは、7世紀の須恵器の杯や壺が出土した。溝01に切られている溝02からは、弥生時代中頃の甕などが見つかった。

微高地の東端には確認調査で縄文土器の出土した溝05がある。溝05は幅約3m、深さは検出面から約60cmあった。今回の調査でも、溝の底からは晩期前半の刺突文のある縄文土器の深鉢が出土している。ここから微高地は下っていき、調査区の東側は、炭の混じった暗灰色の粘土と砂質土が1m以上堆積していた。天川か支流の旧流路であったと推定されよう。遺物はほとんど出土しておらず、埋没の時期は不明である。1区西側では、微高地上に約20cmの暗褐色土埋土の落ち込みがある。遺物は出土していない。

2区は長さ37m、幅3mの南北トレンチである。1区の東側約4kmのJR沿いに位置する。トレンチ南部で厚さ約10cmの暗褐色土層が出たが、遺物は出土しなかった。

縄文～奈良時代にかけて、調査地の周辺では南東方向の天川の支流が複雑に流れていた状況が推定される。



調査地の位置（「姫路南部」）



1区溝05の縄文土器出土状況（北西から）



1区の全景（東から）



## 9. 姫路駅周辺遺跡

(第2次調査)

1. 所在地 姫路市市之郷町
2. 調査面積 1,360㎡ (試掘坪340ヶ所)
3. 調査期間 平成6年10月1日～平成7年3月27日
4. 担当者 秋枝



調査地の位置 (「姫路南部」)

姫路駅周辺で土地区画整理事業が施行されることとなり、平成5年度から埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。平成5年度の調査で姫路市北条の姫路市土地開発公社所有地であらたに遺跡を発見し「姫路駅周辺第1地点遺跡」と仮称した。

平成6年度は朝日橋以東で確認調査を実施することとなった。事業予定地内に2m×2mの試掘坪340ヶ所を30m間隔で設定し、遺跡確認に努めた。

播但線周辺の坪1・2・36・44・52以西では、盛土・耕作土・床土をへて、暗褐色の遺物包含層が認められ、黄褐色土に達する。坪43で竪穴住居跡の一部を確認した。これらの坪の調査成果から、播但線周辺に微高地の存在が予想される。今回は微高地東端を確認したものと推察され、「姫路駅周辺第2地点遺跡」と仮称した。

微高地東端から東へ約400mの区間では、各坪で砂礫層が高まり、遺構・遺物は確認されなかった。この砂礫層東端以東では、ふたたび盛土・耕作土・床土をへて、暗褐色の遺物包含層が認められ、安定した堆積状況を示す。坪93・108・109・110・113では土坑・柱穴・溝などの遺構が検出された。包含層内から弥生～平安時代にかけての遺物が豊富に出土し、事業予定地東端の市之郷線まで包含層は確認されるが、包含層はさらに東へ延びる。遺跡の東西幅は約520m以上で大規模な遺跡といえる。弥生時代後期の畿内産の雲母土器、古墳時代の軟質の韓式土器や奈良時代前期の軒瓦・鴟尾など注目すべき遺物が多数出土し、「姫路駅周辺第3地点遺跡」と仮称した。

姫路駅周辺の遺跡確認調査も朝日橋以西を残すのみとなり、平成5・6年度で確認された遺跡をまとめると、

姫路駅周辺第1地点遺跡〔姫路市北条：弥生時代前期後半～平安時代後半の集落跡〕

姫路駅周辺第2地点遺跡〔姫路市神屋町：弥生時代中期中頃～平安時代後半の集落跡〕

姫路駅周辺第3地点遺跡〔姫路市市之郷町：弥生時代前期後半～平安時代後半の集落跡・奈良時代の寺院跡〕の3遺跡である。姫路駅周辺第3地点遺跡で市之郷廃寺に関係する遺跡が確認されるなど重要な成果が得られ、今後保存方法などを策定することが急務となった。



坪108 土坑内弥生時代中期後半土器出土状況 (北から)



坪113 出土韓式土器



## 1Q 御旅山13号墳

1. 所在地 姫路市飾磨区妻鹿
2. 調査面積 800㎡
3. 調査期間 平成6年8月1日～平成6年8月9日
4. 担当者 松本正信、加藤史郎、中村信義、中浜久喜

平成5年9月3日から4日にかけて播磨平野を通過した台風6号は、思わぬ置き土産を残していった。翌日、台風により表土の流失した御旅山の峰で、地元妻鹿の平井悌二氏が古墳時代の鏡や勾玉などを発見したのである。

市川の河口近く、播磨灘を望む御旅山丘陵上には、三角縁神獣鏡が出土した御旅山3号墳など数多くの古墳が分布している。しかし、この地点は明確な盛土などが確認出来ず、古墳とは認識されていなかった。見つかった遺物は比較的浅いところから出ており、今後も遺物が流失する危険性があった。さらに新聞報道後に一部盗掘を受けた痕跡もあり、急きょ発掘調査が実施されることになった。

発掘が始まると、すぐに凝灰岩の岩盤が顔を見せた。古墳の墳丘盛土は、すでに流失してしまったのか確認できなかった。古墳裾を区画する石列なども見つからない。ただ、4分割した調査区のうち、東側の地点で須恵器の壺の口縁部が出土している。これは、墳丘の祭祀に伴うものであると考えられた。また、最初に鏡などが発見された地点も、その直下で岩盤が出ている。調査では、発見時に取り残したとみられるガラス玉数十点が出土した。

遺物のうち発掘により出土したものは、須恵器壺の口縁とガラス玉など少ない。そのほとんどは、最初の発見時に回収されたものである。2面の青銅製の鏡、刀子や矢柄などの鉄器、硬玉製の勾玉1点、ガラス玉である。鏡は径約9.3cmの獣形鏡と径約7cmの珠文鏡であった。ガラス玉は緑色系のものと青・藍色系に分けることができ、発掘調査分と合わせて266点が見つかった。

発掘調査では、主体部をはじめ墳丘盛土など古墳に関連する遺構は確認できなかった。そのため、古墳の正確な形態は不明であるが、地形などからみて円墳の可能性が高い。主体部は、鏡出土地点の付近であろうが構造を含めて今後の課題である。築造時期については、出土遺物などから5世紀中頃と推定されよう。

◆参考文献 『御旅山13号墳』姫路市教育委員会 1995年



調査地の位置（「姫路南部」）



珠文鏡



変形獣形鏡



## 鹿の像のついた装飾付壺

出土遺跡：見野長塚古墳

見野長塚古墳の後円部の横穴式石室から体長約8cm、高さ約10cmの鹿の像のついた須恵器が発見されました。古来より鹿は日本人にとって非常に親しみのある動物の一つです。弥生時代には銅鐸や土器に鹿の絵を描いて豊穡を祈り、古墳時代には鹿の埴輪を作るなどして死者を祀っています。古事記や日本書紀には神の化身としてしばしば描かれ、播磨国風土記にも鹿に関する記載が多く見られます。

こうした像を配したり、子壺を付けたりした須恵器を装飾須恵器といいます。今回のものは壺に鹿の像がついているので装飾付壺と呼びます。このような遺物は古墳からの発見が多いので、死者を祀るためのものと考えられています。見野長塚古墳からは鹿の像しか見つかっていませんが、他の出土例では猪・馬・犬・鳥・踊る人・相撲をしている人など様々なものがあります。

小像を配した須恵器は主に岡山県・兵庫県・大阪府・和歌山県などで多く出土することが分かっています。市内ではこうした須恵器の発見は初めてのようですが、鹿を配した装飾付壺は姫路市の周辺では龍野市の西宮山古墳や御津町の小丸山古墳などから発見されています。それらの鹿の像に比べて見野長塚古墳のものは非常に丁寧でシャープに、しかも写實的に作られています。特に顔の表情が豊かで、角と尾はよく観察され、うち一頭は肛門まで表現しています。

この装飾付壺には死者に対してどのような思いが込められ、古墳に副葬されたのでしょうか。皆さん古代人になったつもりで想像してみてください。



向かい合う鹿



見野長塚古墳と装飾付壺（北西から）



# **TSUBOHORI**

平成6年度(1994)

## **姫路市埋蔵文化財調査略報**

---

平成11年(1999年)3月31日

発行 姫路市教育委員会 文化部 文化課  
兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷 内海印刷株式会社  
兵庫県姫路市阿保乙367-6